

日本建築学会設計競技で

2年連続最優秀賞受賞

広島工業大学大学院環境学研究所
地域環境科学専攻2年
横川貴史 久安邦明 安井裕之



近年、広島工業大学学生及び院生のデザイン設計競技での活躍には目覚ましいものがあります。専門誌でコンペの発表がある毎に広島工業大学の名が見受けられる程です。今や、全国から注目を浴びる有数の大学となっています。ここでは、その活躍の様子や内容の一端を紹介します。

日本建築学会主催の設計競技は1952年に始まり、毎回違うテーマが与えられ、年一回開催されています。私達はこの設計競技に一昨年と昨年応募し、2年連続で最優秀賞を獲得しました。これは50年余り続くこの設計競技史上初めての快挙です。

敷地の選定

この競技では実在する敷地を選定し、その場所を舞台とした提案でなければなりません。場所の歴史や環境、社会的問題点などといった特性を読み取り、それに対しどれだけ説得力を持った魅力的な提案をすることが勝負になります。私達はこれまでいくつかのコンペを共同で取り組んできた事もあり、今回も自然と3人でやる事になりました。各自、就職活動や資格試験の準備、大学の講義や研究の合間の時間を見つけながら、いくつかの敷地の候補を挙げ実際に調査を行いました。今回のテーマである「みち」に沿った提案を考え、意見を交わしながら敷地の写真を撮り、くまなく

歩き、話し合いを重ねました。

今回、発展性のある提案になると感じた尾道市を舞台とすることに決定しました。

尾道市での提案

尾道は平安時代以来港町として栄え、幕末以降急速に斜面への迷宮的都市を発展させてきた非常に魅力的な都市の1つです。しかし近年、高齢化や家屋の老朽化により街に廃屋が目立ち始めています。それに伴い生活圏のアクティビティが低下しつつあります。尾道という街は「坂の街」、「寺の街」、「文学の街」、「映画の街」として全国有数の地であり、それと生活圏が共存しているところにおもしろさがあると考えました。しかし、尾道の観光ルートは多いようでも、実はかなり限定されており、つくられた尾道らしさしか見えていない観光客も少なくありません。散策路として整備されているみちを1本入ると、そこには各住戸へ無数に枝分かれしている幅1.0m~1.4m程度の迷路的路地により構成されており、多くの意外性をはらんだ魅力的な路地空間となっています。このまま生活圏の衰退が進行すれば、街の活気がなくなり観光地における衰退にも繋がるでしょう。

本計画では、現在100軒近く存在する廃屋と路地を綿密に絡ませることにより、新たな尾道の路地空間を提案しました。



2003年度日本建築学会設計競技「みち」最優秀賞作品



私達の提案したLaBy[Labyrinth] - オノミチ - は現在の観光のために整備されたみち - 「表」と生活道とされ未整備のみち - 「裏」のはっきりとした境界に建築的な道を介させることで領域を曖昧にする。例えば、既存のみちと隣接している廃屋のなかに新たな「みち」(インフラ)を通し、空き家の状況によって少しずつ「みち」を変化させる。さらに、そこはただの通り抜ける為のみちとするのではなく、歩行者の足が止まる要素(無人野菜売り場, 東屋, ミニギャラリー...)を用意し、また、廃屋はかつて寺が果たしていたオープンスペースの役割も果たさせる。そこは住民と観光客が交わる結節点となり、新たなコミュニティを生み出すというような提案です。



「みち」模型写真

現在の傾斜地の問題として

- ・階段、坂道がきつい、交通の便が悪い。
- ・高齢化、少子化問題
- ・下水道の整備がなされていない
- ・消火活動に障害

などが挙げられます。結果、人々は傾斜地より離れ、多くの空き家があふれています。私達は、それらの空き家に8つのLaby(私達の提案)を計画しました。Labyによって傾斜地にはコミュニティ、生活感、活気、住み続ける、新しいみちが生まれ新たな尾道の姿を目指しました。

既存の路地に加え、空き家と庭、またそれらから伸びる立体路地が生活路、観光コースとなり、尾道の街をより変化に富んだ迷宮都市へと変貌させます。

作品の提出、支部通過、全国審査へ進出

これまで幾度も同じメンバーでコンペをやってきたので、作品をつくっていく過程の中で3人それぞれが何をすべきか、自然に役割分担がなされていました。連日のようにゼミ室に泊り込み、何とか作品を提

出することができました。

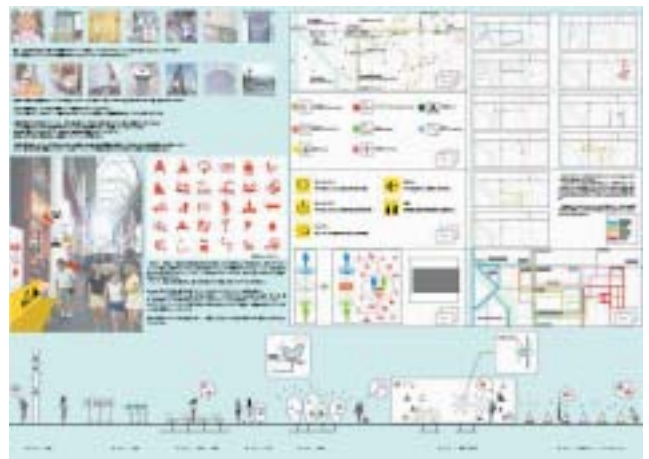
このコンペは様々な選考過程を経て入賞作品が決まります。まず、作品の設定した場所にあたる地区の学会支部で選考があり、作品が数点選ばれ、次の全国審査へと進みます。本部でさらに審査がなされ、上位数作品が選ばれます。最終審査は学会大会で、審査員の前で応募者がプレゼンテーションを公開で行います。そこで各賞が決定されます。

私達の作品が全国の上位12点に入選したという内容の手紙が届きました。その日からまた連日ゼミ室に泊まり込み、模型の制作にあたりました。提出した図面の中の断面図から、また新たな図面を書き直し、模型の材料や色、プレゼンテーションの仕方などを話し合いました。

何とか発表の前日、会場である愛知県に発つ日の朝に模型とPOWERPOINTが完成し、発表の細かい練習は現地のホテルでする事にしました。

学会大会での公開審査

9月5日、日本建築学会全国大会の公開審査会場には私達の作品を含む他の入選作品も展示されていました。それらは全国色々な場所を舞台とした力作ぞろいでした。各チームのプレゼンテーションは熱のこもった意欲あふれるものばかりで、とても刺激を受けました。私達は12チーム中10番目で発表でした。その後、質疑応答があり、建築の意匠、歴史、都市計画、土木、福祉といった各分野の専門家からの厳しい意見や質問、審査員同士の白熱した討論が繰り広げられました。審査が進むにつれ最優秀賞の候補がしぼられ、私達の作品は最後まで残り最優秀賞に決定しました。2年連続の受賞が決まった瞬間は感無量でそのときの感動は今でも忘れません。



2002年度日本建築学会設計競技「外国人と暮らすまち」最優秀賞作品(部分)